みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

今回の『みんなで語ろう民放史』は『テレビマンユニオンニュース「静かな声の人・村木良彦さんを悼む」』の追悼文を軸に、去る1月21日他界した元テレビマンユニオン社長、地方の時代映像祭プロデューサーなど、多方面で映像文化の発展に尽くしてきた村木氏を偲ぶ番外編としました。（以下、敬称略）

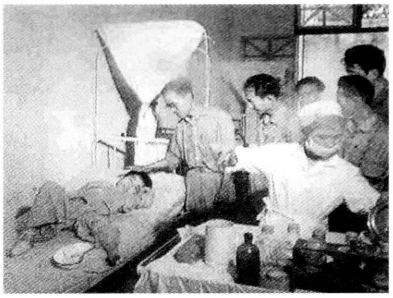
村木良彦氏

『あなたは…』『現代の主役・日の丸』

1959年（昭和34年）、ラジオ東京（現TBS）に入社した村木は、66年、テレビ演出部からテレビ報道部に異動。『TBS50年史』によれば、同年2月から『現代の主役』、67年6月からは『マスコミQ』が始まるなど夜のテレビ報道番組は鋭い切り口の作品を次々と送り出した。ここで村木は萩元晴彦とドキュメンタリーを制作。66年11月の『あなたは…』は、街頭でぶっつけに「あなたは？」と問いかける斬新なインタビュー構成で注目され芸術祭奨励賞受賞。67年2月、建国記念日を前に、今度は『あなたは…』の手法で〝日の丸〟について問いかける『現代の主役・日の丸』を制作。番組は閣議で問題視され、論議を呼んだ。

萩元、村木、配置配転を拒否、テレビマンユニオンの結成へ

67年7月、田英夫が西側テレビとして始めて北爆下のハノイに入り、一連の番組でその実態を詳細に報告。10月30日、その集大成で60分の『ハノイ　田英夫の証言』を放送、芸術祭テレビドキュメンタリー部門に参加した。この番組はスタジオにプロジェクターを持ち込み、フィルムを見ながら田が報告する。当時としては目新しい手法を取り入れた。この時のスタジオ担当が村木だった。



『ハノイ　田英夫の証言』

自民党は激怒するが、TBS社長今道は報道機関として当然だと反論。こうした緊張状態の中、翌年3月、TBSの取材車が成田空港反対同盟の婦人たちを集会場に運ぶという事件が勃発、TBSは自滅する。田英夫はキャスター解任。村木と萩元は職場配転を通告され、拒否。全社的な支持の大争議となる。『かわら版』という全職場の動きを伝える新聞が作られ、全社で〝愛読〟された。

配転は自民党の圧力と囁かれたが、二人は…「テレビジョンとは何か？」をめぐる企業側のテロ行為であるととらえ、「表現」をめぐるたたかいを提起した…村木は『テレビマンユニオン史』に、こう記している。事実、村木の配転は、彼の作品『わたしの火山』がスポンサーから前衛的にすぎるとクレームをつけられ、村木が番組を降板させられたのがキッカケだった。

結局、闘争は敗北に終った。

村木が「TBSを退社してフリーになる」と同期生の吉川正澄に決意を明かしたとき、「集団で退社して制作集団を作るというのはどうだ」と切り出したのは吉川だった。同じく同期の今野勉と三人で基本計画を練り、「テレビマンユニオン」を設立することになる。

村木良彦

数多くの新鮮なテレビドキュメンタリー

TBS時代からチャレンジ精神を一貫

《村木の魅力は、一貫して映像メディアのソフト開発に実験を重ねてきたことだろう。「パーフェクト村木」と仲間たちにいわれているように、村木は単なる実験として終わらせず、その実験を一つの成果として結実させているのが特徴である。実験というよりは実践であり、先行的な意義を追及した番組制作のテストパイロットだったというべきだろう》志賀信夫『映像の先駆者125人の肖像』より

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

Television Union News

静かな声の人・村木良彦さんを悼む

弔辞　故・村木良彦へ

君は映画監督を目指していた。その志を自ら変えたのは、テレビドラマ『私は貝になりたい』を見たからだった。歴史に翻弄される無名の人間が描かれていた。

ディレクターは岡本愛彦だった。岡本のいるテレビ局へ行こうと君は決めた。

昭和三十四年度入社の新入社員のなかに君も私もいた。新人たちの最初の仕事は、四月十日の皇太子と美智子妃の結婚パレードの中継の手伝いをすることだった。

君が配置されたのは、四谷のビルの屋上だった。やってくる馬車をいち早く捕らえることのできる場所だった。NHK，NTV、TBSの中継全局がテレビカメラをその屋上に設置した。

中継前日、NTVのカメラが突然地上に降ろされた。命じたのはNTVの中継の指揮をとっていた牛山純一だった。

中継当日、NHKとTBSのカメラがいち早く馬車を捕らえた。NTVの画面には、空の道路しか映っていなかった。実況中継の女子アナが焦ったように、〝まだ見えません、もうすぐ見えるはずです〟とくり返していた。

君は一瞬にして悟った。何も映っていないNTVの画面が一番緊迫していた。そこには、現在の時間と空間を伝えようとあがく人間がいた。やがてNYVのカメラだけが最も映したい人間、美智子妃の顔をクローズアップで捕えた。捕え続けた。

そのとき、君は、衝撃とともに、テレビとは何かを感じ取ったのだった。

かくて君は、ドラマにおける岡本愛彦とドキュメンタリーにおける牛山純一を原点とすることでテレビ人生を始めることになった。

それは、君に負わされた宿命であったのだ、と今にして私は思う。純粋でストイックな君は、その原点を踏まえてテレビの可能性をつきつめていく仕事を始めるのだが、それは同時に、テレビへの闘いそのものとなっていくのは必然でもあった。

テレビ演出部に配属された私たち6人は「dA」という同人誌を作って、テレビの可能性を日夜論じ合った。

最初にドラマデビューしたのは実相寺昭雄だった。大島渚脚本の『あなたを呼ぶ声』は新しいテレビドラマの時代を告げる鮮烈なものだった。続いて君が、松本俊夫脚本の『傷だらけの夜』でデビューした。硬質なそのドラマは、君の、テレビとの闘いを告げる狼煙（のろし）であった。

入社五年後、君と私は新たな絆で結ばれることになった。芸術祭参加ドラマのディレクターに私が指名され、アシスタント・ディレクターとして、君と、そして同じく同期の吉川（きっかわ）正澄が指名されたのだった。私に比べて、ドラマへの

思いや業績が強く長く、かつ一歳年上の君にとっては不本意な人事のはずだったが、君はそんな素振は毫も見せなかった。

ADとしての君の役割は、沖縄戦で地元住民が籠もり日本軍に追い出される洞窟を探し出すなど戦闘場面の準備だった。貴公子然とした君には最も似つかわしくない役割だと誰しも思った。

しかし、君は、猛毒のハブのいる藪に分け入って誠実に緻密にその役割を果たした。

私はその時秘かに心中に決めたことがあった。将来、君と、そして同じようにエネルギッシュにADをつとめてくれた吉川から何か頼まれたら必ず応じよう、ということだった。

ほんの数年後に、その二人から、人生の大事を相談され、私の秘かな決意を試されることになろうとは、そして、その時のトリオが日本で最初のテレビ番組制作会社を作ることになるとは、想像もしないことだった。

テレビ演出部からテレビ報道部へ移った君は、『あなたは…』『ハノイ　田英夫の証言』などの鮮烈なドキュメンタリーの制作にかかわり、つづいて『わたしのトウィギー』『わたしの火山』など、従来のドキュメンタリーの枠を破る映像を世に突きつけた。

『わたしの火山』が君の非制作現場への配転の引き金になった。同じ部の萩元晴彦も同時に配転になった。つづいて田英夫のニュースキャスター辞任、成田空港建設反対同盟の婦人たちを取材車に乗せた成田事件が、一九六八年三月に集中して起こり、その処分に反対するTBS闘争が始まった。

闘争が終えんした時、君は挫折感の中にいた。君と萩元と私は、闘争の経緯を『お前はただの現在にすぎない』という本にまとめて刊行した。サブタイトルは「テレビに何が可能か」であった。

非現場に行かされた君は、ひとりの制作者として生きていくには自立しかないと決意し吉川に告げた。吉川は、君の決意に呼応する仲間がいるはずだ、制作者の集団を作ろう、と提案した。

新宿のバーから二人の呼びかけに最初に応じたのが私であったのは光栄だった。それはかねてからの私の決意のことだった。

かくて制作会社テレビマンユニオンは、君と吉川と私と、そして初代社長萩元の四頭立ての馬車として出発することになった。それは既存のテレビ制作システムへの闘いの始まりだった。

君の闘いはそれからも止まなかった。テレビマンユニオンのあとに生まれた多くの制作会社を結集して全日本テレビ番組製作社連盟を君はたちあげた。自ら理事長もつとめた。

東京メトロポリタンテレビのゼネラル・プロデューサーを引きうけたのは、ビデオ・ジャーナリストという新しい制作者を育成し、未来的なメディアを作ろうという君の思いからであった。さらに、ローカル局で苦闘する制作者に光をあてようと「『地方の時代』映像祭」のプロデューサーを長くつとめてきた。

ATP理事長時代の村木良彦
『放送批評』（現『GALAC』）1993年2月号より

制作者の全国横断組織「放送人の会」にあっては、幹事として、放送人が選ぶ放送人に与える賞「放送人グランプリ」を提唱し自ら運営にあたってきた。

まだ道は半ばだった。君は昨年病に倒れた。しかし、こんなに早く君がいなくなるとはつゆ思わなかった。昨年暮れ、病室のドアを開けて、おーす、と言うと、ベッドに坐ってパソコンに向かっていた君は、おうと答えて、例のはにかんだような笑みを浮かべた。年明けには退院できそうな気配だった。

地方の時代映像祭トロフィー
村木は1992年からプロデューサーをつとめる

だからあの日、酔っ払って夜半に帰宅した私は、留守電の点滅を無視して寝てしまった。

翌朝、それが君の死を告げるものであったことを知った私は、タ

クシーで病院に駆け付けた。君は霊安室に静かに横たわっていた。

思わず、村木、どうしたんだ、と声をかけそうになった。白布をとって顔を触ると冷たかった。

信じられないことに、確かに君は、死んでいた。

君と知り合って四十九年。君にとってはひとときの休息もない長い長い闘いの道のりであった。君は、一度として大声を出したり険しい顔をしたことが無かった。いつも静かにほほえみを浮かべていた。

しかし、君の言動は、峻烈で妥協を許さぬ純粋さに貫かれていた。君は、その場しのぎの嘘や方便を嫌った。

今、私の弔辞を聞く君の思いが、私には手にとるように解る。合理主義者の君は、こう考えているのではなかろうか。

今野よ、私は死んだのだ。死者には生者の声は聞こえないのだ。私が何を仕残したかを付度するのも結構だが、それより、生き残った者、生かされている者が何をすべきか、それを考え、実行することだよ。

確かに、君のいう通りだ。君にはもう私の声は届かない。

しかし、村木よ、死者に生者の声は届かなくても、生者には死者の声が聞こえるのだ。

村木よ、これからも私たちに語りかけてくれ。私たちは耳を澄まして、君の声を聞くことにしよう。

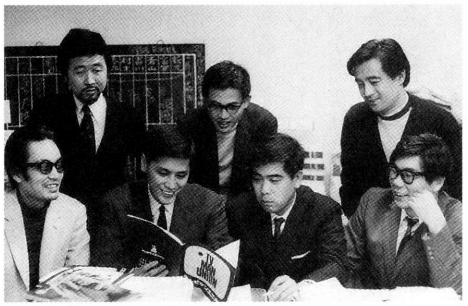
君は充分に闘った。どうかこれからは、先に逝った奥さんと安らかに休んでくれ。そして時に声を聞かせてくれ。

これが私の君への最後のお願いだ。

だから、さよならは、言わない。

二〇〇八年一月二十九日

今野　勉



スタート当時、TBSのリハーサル室を借りて打ち合わせの毎日だった（後列真ん中 村木）（前列　左から　吉川、宝官、萩元、今野）

村木さんと浅井カメラマン

佐藤利明

村木良彦さんに初めてお目にかかったのは今から40年ほど前、私が勤務していたテレビ局の報道取材部に転任され、芸術祭参加番組の『あなたは…』を撮られたときです。それ以来村木さんの造った番組を観る度に、私は絶えず新しい手口を示され続けたといえます。

カメラマンにとっての関心事は、対象をどのように撮るかに懸かっているのですが、村木さんの番組を身近に観られたのは願ってもない幸運だったと思っています。

村木さんは、私の僚友だった浅井隆夫カメラマンと組んで最初に『わたしのトウィギー』を造りましたが、この作品で村木さんのいうアクションフィルミングと「コラージュ」による状況論が、私に的確に理解できたとは思いませんが「モンタージュ」を拒否した手法には虚を衝かれました。繋がりを求めるドキュメンタリーの編集に、あえて繋げない手口を示したのだから衝撃でした。

村木さんの作品で、私が最も感銘を受けたのが『4月23日・駒沢・釜本邦茂とその観客』です。「ノンフィクションによるテレビドラマ」と銘うたれたこの作品で、私が観たものは走り続けるサッカー選手の上半身でしたが、主題を感じたものは「時間」や「若者」でした。

村木さんは浅井カメラマンと組んで、『フーテンピロ』や『クールトウキョウ』など「コラージュ」の話題作を次々発表し、報道局最後の作品が『わたしの火山』です。

この作品は放送直前に音楽を差し替え放送した経緯がありました。後になって変更前の曲『帰って来た酔っ払い』に載せ変えた村木さんの意図通りの作品を見てわたしは仰天しました。何も怖いものが写っていないのに恐怖が迫ってくるのです。これも私には初めての体験でした。

この件が引鉄になって村木良彦さんの職場配置転換があり、引いてはテレビマンユニオン設立に結びついていったわけです。そしてこれからという時になって唐突に私の盟友浅井隆夫さんが還らぬ人となってしまいました。

私が、『遠くへ行きたい』でカメラマンを担当して気付いたのは

村木さんの懐の深さです。新しい手口、例えば「津和野」で重い同録カメラを担いで自転車で狭い路地を走ったり「福山」ではフィルム取材限界の10分間1カットのインタビューを歩きながら撮ったりして、多少乱暴でも村木さんは人一倍面白がってくれました。40年前に浅井カメラマンが、急に水を得た魚のように活気を帯びた訳は、感性の一致も在ったでしょうが村木さんの底知れぬ探究心に触れたからだと私には思えます。

故人の二人は今どんな語らいをしていることでしょう。

『あなたは…』

村木さんの強い脳

田中直人

今野さんの弔辞に、「あの日、酔っ払って夜半に帰宅した私は、留守電の点滅を無視して寝てしまった」とあるが、その元凶は私である。あの夜、久しぶりに今野さんとワインを飲み、カキをつつき、話があまりに楽しかったため、ついつい深酒をした。当然ながら、私も村木さんの訃報を伝える電話に、正気の対応はできなかった。

今野さんから、盟友の死の床に駆け付ける機会を奪う結果となり、本当に申し訳ないことをしたと思っている。が、その一方で、村木さんが亡くなったまさにその時刻、今野さんと語り合ったのは、他ならぬ村木さんのエピソードだったことを、私自身は尊い記憶としてひそかに刻んでいる。

村木さんの病床へは、何度かお見舞いにうかがった。そのたびに、一向に衰えぬ気力と知力に感銘を受けた。最初は、肝臓を摘出した大手術から2週間ほど経ったときだった。点滴を受けていた村木さんは不意に「今ドストエフスキーの企画を考えているんだけど」と話された。お茶の水のニコライ堂を建てたロシア正教の宣教師ニコライ・カサートキンは、ドストエフスキーの知己だった。村木さんは、最近出版されたニコライの日記を題材に、文豪の知られざる側面を描く企画を構想したのだという。調べてみたところ、ニコライが一時帰国しモスクワに行ったとき、たしかに二人は出会っていた。

会話は日本のことにも及んだと想像できる。次のお見舞いでそのことを話したところ、また、新たなアイディアを思いつかれたようだったが、ついに詳しく聞く機会を逸した。

最後は、亡くなる8日前。福岡伸一さんの『生物と無生物の間』を持っていった。そのときは、もう手の指に力が入らず、ようやく2～3ページをめくっただけで、枕元におかれたので、実際にお読みになったかどうかは分からない。同行した是枝裕和君の新作映画が6月公開だと聞くと、笑みを浮かべ「それならちょうどいい」とおっしゃった。その頃には退院しているという意思表示。村木さんは、まったく死ぬ気ゼロだった。

亡くなった後、遺品整理のために仕事場を訪れ、驚いた。幅30センチほどの歩けるスペースを除き、あとは蔵書と書類とVTRの堆積。村木さんの思考の、圧倒的質量を物語る光景である。〝発掘〟には3日かかった。ご遺族のお許しをいただき、テレビ論、メディア論、都市論、美術論、写真論など、貴重な蔵書およそ100冊と、『近代遺跡の旅』をはじめとするハイビジョン作品を、テレビマンユニオンの保管資料として譲り受けた。近日中に、社内図書室の一画に「村木良彦ライブラリー」が生まれる。その他の資料はすべて、川崎市民ミュージアムで保管される。

村木さんの強い脳の中には最後まで、ドストエフスキーをはじめとして「やりたい企画」の数々がひしめいていたに違いない。永遠の幻となったそれらの企画を、心から惜しむ。

創立10周年記念パーティーで語り合う村木（左）と吉川（右）

創立総会（1970.2.26）

記憶に残るクローズアップ

重延　浩

村木良彦さんの逝去に当たって、多くの方々から追悼の言葉が寄せられ、改めて色々なテレビ論が各所で語られたように思います。それはテレビメディアにかかわる人々ひとりひとりにとってのテレビ論であり、村木さんがそれらの触媒を果たすような永遠の人になったという思いがします。皆さんのお言葉、ほんとうにありがとうございました。

私たちが、テレビマンユニオンを誕生させた赤坂のTBSも装いを大きく変えました。新しいTBSをみながら、TBS時代に生まれた村木さんの美学を今思いだします。

私がTBSに入社した時は、村木さんは演出1部に所属する先輩でした。私は放送実施部に配属されました。放送実施部は放送の送出をする部で、私は月曜日夜9時にマスターコントロールルームから、村木さん演出の『陽のあたる坂道』というドラマの放送を送出する役でした。『陽のあたる坂道』は石坂洋次郎の小説を脚色したものでした。しかし、そのドラマの映像はまさに村木美学であり、望遠レンズを使い背景のフォーカスを和らげたクローズアップは、それまでのテレビにはない心象風景を作り上げていました。物語より、心理を映像化した村木美学でした。

演出家を志していた新人の私はその映像に感動し、秘かにその演出ぶりをEスタジオに覗きに行きました。深夜の2時頃のことでした。いくつかのセットのあいだで、演出家はカメラマンたちと延々とカメラアングルについて語り続け、出演者たちが緊張して、その様子を見つめていました。凛とした創造の空気でした。

私がようやく演出1部に異動したときは、村木さんが、その番組の演出を途中で降板するときでした。その不本意な異動から、村木さんは、自己のテレビ論を確立していったように新人の私には思えました。理念の原点に実像が必要である—私はそんな原点を村木さんに教えられたような気がします。

自分のオリジナルのクローズアップを創ること、その原点を私は記憶します。

永遠の記憶です

合掌

故　村木良彦氏

創立メンバー懇親会（1997.2.26）

写真・資料提供
テレビマンユニオン
東京放送
吉川洋子
放送批評懇談会
志賀信夫